

# 山頂の宝篋印塔と千葉・信濃に残る武石氏の足跡

藤由美

## はじめに

八千代市村上の正覚院の釈迦如来立像が、奈良西大寺や鎌倉極楽寺の釈迦像と同様な清涼寺式で、鎌倉時代に叡尊・忍性など真言律宗の僧により広められた特殊な仏像である（1）ことから、筆者は清涼寺式如来像や忍性の遺した石造物などを中心に忍性による東国布教の足取りを追ってきた。

中でも、忍性の関東進出の拠点となったつくば市の小田山山頂の宝篋印塔と、「良観上人」（忍性）の銘のある箱根山の宝篋印塔の関連を調べると、後者には、結縁衆として「武石四郎左衛門尉宗胤」の銘があり、その名は、千葉市花見川区武石町（たけいしちよう）の地を領した武石氏につながる人物名であった。

さらに、同時代に山頂に建立された宝篋印塔として、長野県長和町の仏岩宝篋印塔があり、この塔にも、千葉氏一族の武石宗胤と推定される人物名が造立者として刻まれていた。さらに、この仏岩から大門街道を下った山麓には、千葉市武石町と同名の武石村（たけいむら）平成一八年三月上田市に合併）がある。

本稿では、小田山・箱根山・仏岩の宝篋印塔の宗教的な建立意図と、銘文に登場する武石氏について、千葉と信濃に残るその足跡を紹介したいと思う。

### 一 「高山峰上」に建つ宝篋印塔

#### （一）小田山宝篋印塔

鎌倉新仏教台頭の時代、戒律の重視と殺生禁断・慈

善救済を實踐する奈良西大寺の僧叡尊によりその弟子の忍性が東国に派遣され、常陸の小田山山麓に三村山清冷院（三村寺）を建立したのは、建長四年（一二三二）であった。忍性は、弘長二年（一二六二）鎌倉に移って活動するまでここに十年間止住し、常総に広がる内海の水運を利用して鎌倉進出の地歩を固めたという。現在、三村寺は廃寺で、鎌倉期の特徴ある石造物を残すだけであるが、その一つとして、三村寺の奥の院ともいえる小田山（宝篋山）山頂の宝篋印塔がある。

数年前に整備された登山道を二時間ほど登ると、北面に筑波山、東南西面に関東平野を一望する標高四三メートルの山頂に至り、壮大な宝篋印塔を仰ぎ見ることが出来る。花崗岩製で、欠損した相輪を補って復元すると二・五メートル以上の高さになる。

建立年を記す銘はないが、基礎を二区に分かつ点と笠下を三段に造りだす点は、忍性の故郷の奈良県額安寺の宝篋印塔（文応元年銘 一二六〇）に、塔身に二重円相光形を彫りくぼめ頭教四仏を浮彫りする点、塔身下に反花座を置く点は奈良県観音院宝篋印塔（弘長三年銘 一二六三）に類似する。（2）

おそらく忍性がこの地を去り鎌倉に向かおうとしていた弘長二年前後に、額安寺宝篋印塔に銘のある大蔵派の石工の手により作られた塔であろう。

屋根の四隅には風鐸を吊るす孔が穿たれてあり、往時は莊嚴な音を響かせていたと推定される。

## （二）箱根山宝篋印塔

箱根山中、精進池のほとりに、「多田満仲の墓」と俗称される現高二・六七メートル（後補の相輪を除く）の宝篋印塔がある。ここは中世の湯坂道の峠の最高点に位置し、周囲の「六道地藏」などの石仏石塔と共に石造物群を構成している。安山岩製のこの宝篋印塔は、塔身には三面に胎藏曼荼羅の四仏の種子を陰刻し、残り一面には如来坐像を半肉彫で表す。塔の笠の軒とその下二段の周囲には、宝篋印陀羅尼經の梵字が刻まれている。基礎側面の輪郭が一区で格狭間が造られるなど関西様式の特徴も見られ、関東様式へ移行期の宝篋印塔として学史的にも重要とされる石塔である。

格狭間には、西面に施主「四郎衛門尉」と大願主「祐

「禪」および「永仁四年（一二九六）五月四日」の銘、

南面には結縁衆として「武石四郎左衛門尉平宗胤及月光源氏女源宗経」「行事僧寂日」、石工として「大蔵安氏」の名がある。北面には供養導師として「良観上人」（忍性）の名があり、さらに正安二年（二三〇〇）の銘とその後「心阿」の名が追刻されている。（3）

銘文中「四郎衛門尉」は佐々木（京極）近江守源氏信、「月光源氏女」は氏信の娘で武石宗胤の妻、「源宗経」は氏信女（宗胤妻の姉妹）を母にする佐々木加地宗経（4）と推察されている。

### （三） 仏岩宝篋印塔

長野県長和町の大門街道沿いの仏岩登山口から登山道を三〇分歩き、梯子を三連よじ登った標高一三三三メートルの仏岩山頂の鉄柵の中に宝篋印塔がある。

安山岩製、相輪と隅飾を欠き、残っている現石塔の高さは八五センチである。塔身四面の月輪内に金剛界四仏の種子、屋根と基壇には宝篋印陀羅尼経の经文が梵字で刻まれてあり、また岩の下で発見された隅飾に

は经文の冒頭部分が残されている。

『信濃史料』（5）によれば基礎に次の銘文がある。南面「応長第一曆南呂上旬□□弟子□□菩薩□□妙法□□人生□滅罪□□出離生死頓証菩提仏果□円満乃至法界 利益□□印□石塔婆一基所奉（力）造立供養如件 敬白」

西面「肥前太守阿弥陀□□」、北面「息女并日光□宮□」、東面「近江禪閣□善生□」

銘文の建立年の応長元年（一三二二）八月は、箱根山宝篋印塔の追刻銘の正安二年から十一年後。関東形式であるが、基礎の枠が二区に分割されていない点は、箱根山宝篋印塔と同じく関西の影響を含んでいる。

なぜ山頂に建立し、銘文の名はだれかという問いに『信濃史料』や『新編長門町誌』（6）も答えていない。

### （四）「高山峰上」の宝篋印塔の建立意図と寄進者銘

宝篋印塔は、階段状の笠と四隅に隅飾を持つことが特徴で、中国の呉越王銭弘俶が諸国に立てた金塗塔が原型だとされている。これに宝篋印陀羅尼という経を

納めたため「宝篋印塔」の名称が生じたとき、箱根山と仏岩の宝篋印塔には、宝篋印陀羅尼が直接刻まれている。宝篋印陀羅尼経には、「若し人往きて高山の峰上に在り、至心に咒（宝篋印陀羅尼）を誦さば、眼根に及ぶところの遠近世界、山谷林野江湖河海、その中に有るところの毛羽鱗一切の生類は、惑障を碎破し、無明を覚悟す、本有の三種仏性を顕現せしめて、畢竟大涅槃中に安らかに処る」とある。(2)

宝篋印塔は普及するにつれ、滅罪・延命などの利益から追善や逆修の供養塔・墓塔として造立されていくため、山頂の宝篋印塔の建立意図も不明になっていったと思われるが、「高山峰上」に建立して眼下に見渡す限りの全てのものに遍く宝篋印陀羅尼の功德を及ぼし、生類全ての成仏を果さんとする意図は、窮民救済と殺生禁断を説き実践した忍性の教えのものであり、三つの山頂から展望する関東・東海・中部の広い範囲は、また忍性の東国布教の志の表れでもあった。

箱根山宝篋印塔の銘文を参考に、仏岩の寄進者を探ると、「肥前太守」は「武石四郎左衛門尉宗胤」すなわち『伊達世臣家譜』にある「胤氏子従五位下肥前守初

称弥太郎・又左衛門尉宗胤……」であり、「近江禪閣」は近江に基盤を持つ実力者の佐々木（京極）近江守氏信。「息女」は武石宗胤の妻で氏信の娘、箱根山塔の「月光」で、佐々木道誉の大叔母となる人物である。さらに「日光」は、月光の姉で小泉郡上田庄に所領をもつ大江上田氏に嫁いできた氏信の三女という。(7)

## 二 千葉氏流武石氏の系譜と千葉市内の武石氏史跡

箱根山宝篋印塔の「結縁衆」の「武石四郎左衛門尉宗胤」は、千葉六党のひとり武石胤盛（一一四六～一一五）の曾孫である。胤盛は、源頼朝の旗揚げで功を為した千葉常胤の三男、母は秩父重弘の娘であり、千葉郡武石郷を領したことから郷名をもって武石三郎胤盛と名乗り、父常胤が頼朝から受けた陸奥国の所領の宇多郡・伊具郡・亘理郡の一部を譲られている。元暦元年（一一八四）に常胤とともに木曾義仲追討で功をあげ、『吾妻鏡』には、建久二年（一一九二）正月一日千葉介常胤が献ずる塩飯（おうばん）式の献上役として「砂金は三郎胤盛」とその名が記載されている。

宗胤（一二五一～三一四）の代に拠点を亶理郡に移して亶理氏と称し、武石に残った系統は千葉氏・里見氏に仕えた。宗胤に関する千葉市内の史跡はほとんどないが、胤盛と曾孫の武石長胤に関する史跡や伝承地は、花見川区武石町と長作町に数多く残っている。

### （一）真藏院と阿弥陀一尊板碑「武石の板碑」

武石町の真藏院は、大同元年（八〇六）興教大師による開山と伝えられ、建久八年（一一九七年）武石三郎胤盛が、母（秩父氏）の菩提を弔い、柳地藏菩薩を祀って、中興開山したという。境内には秩父緑泥岩の「武石の板碑」、波切不動堂、その裏山には羽衣神社があり、墓地を抜けると、武石城や大小塚があったと伝承される畑の台地に出る。

「武石の板碑」と称される阿弥陀一尊板碑は、緑泥片岩製の高さ二・三七メートルの武蔵式板碑で、千葉市指定文化財である。伝承によれば、武石胤盛の母親の菩提の追善供養に建立した七基の板碑のひとつで、当初は、須賀原の愛宕山古墳に建立され、江戸時代に

真藏院の波切不動堂の山下に移したと伝えられ、現在は本堂前に設置されている。

板碑銘文は「(右為)先妣聖靈出離生死証大菩薩也／永仁第二曆／季秋卅之天、種子はキリクで、阿弥陀如来を表す。この永仁二年（一二九四）の年銘は、一二一五年に没した胤盛の建立とするには八十年余のかい離があり、和田茂右衛門氏は、永仁元年に武石氏を相続した武石三郎胤晴と推定している(8)が、永仁四年銘の箱根山宝篋印塔に名のある武石宗胤の建立も考えられる。

波切不動堂は、正元元年（一二五九）、胤盛の曾孫の長胤が建立し、胤盛が守り本尊とした一寸八分の金仏の不動尊が祀られているといわれ、ここが海辺だったころは漁民の信仰を集めていた。

波切不動堂の裏山に祀られている石碑「羽衣神社」は、千葉氏に広く伝わる羽衣伝承地のひとつで、この裏山、またはこの下の池に天女が舞い降り、羽衣を奪われた天女から生まれたのが、武石胤盛という。

### （二）愛宕神社古墳

真藏院の板碑が元あった場所というのが、検見川道を南へ一キロメートルほど行った須賀原の愛宕神社古墳で、『千葉郡誌』(9)によれば、武石胤盛の母(秩父氏)は故あつて海中に身を投げて漁人の網にかかり、その遺骸を愛宕山に葬り、菩提を吊つて七基の石碑を建立したという。宝暦三年(一七五三)にこの地が開墾された際に、残されていた板碑一基が真藏院へ遷された。なお、古墳には石室があり、直刀、鏃、耳環などの遺物が出土したとのことで、古墳時代の古墳を中世に供養塚として利用したと思われる。

現在は平成二二年に改築された社殿の中に「愛宕大権現」銘の石碑が祀られ、その脇には「貞永元年壬辰三月廿四日」と「下総国千葉郡武石郷」の銘が刻まれているが、石質や形状から、近世以降の作と思われる。なお、現地の「由緒」板に寄れば、貞永元年(一二三二)三月二四日は、千葉常胤の三十三回忌の命日にあたるとされる。

### (三) 武石神社と城館跡伝承地

真藏院の裏山から京葉道路武石インターへ続く台地上は、「武石城」があった場所といわれている。武石神社について『千葉郡誌』には、「幕張町大字武石に在りて武石城址の内にあり。圃中小塚あり上に椎樟等の雑樹を生ず。小石祠あり傍に古墓の壊石あり。土地の人は『おたけ様』と称す。即ち武石様の略にして武石胤親(三郎又は蔵人丞と称す)の墓なりとなす。其の西方四十間餘の処又小塚あり、竹篠叢生す。それ其の妻の墓なりとなす。蓋し胤親は足利義明に仕へ其の昔国府臺の戦に討死せしと云ふ。」とある。現在、特に城館跡らしき遺構は残っていないが、畑の隅の「おたけ様」

伝承の塚には、鳥居と、昭和一五年に造営され、平成一九年に改築された「武石神社」の社殿がある。神紋は月星紋、その境内にある昭和一五年造営時の「武石神社」銘の石碑には「当神社ハ千葉介常胤朝臣ノ三男武石三郎平胤盛朝臣以下武石氏累世ノ神靈ヲ祭祀スルノ社ニシテ往古ヨリ此ノ地ニ鎮座シ地人尊崇シテお武石様ト称ス」と刻まれていて、これらの伝承をもとに、平成一九年には「おたけ様の御由緒」の看板が設置されている。中世前期に遡る館跡などは不明であるが、

古墳が武石氏の祖先を祀る塚として信仰されていることは、愛宕山神社古墳と共通している。

#### (四)「武石明神」三代王神社

武石三郎胤盛が武石に居城して三二年後の建仁二年(一一二〇)、郷中安全の守護神として明神社を創建、「武石明神」と称したが、文龜元年(一一五〇)に社号を三代王神社にあらためたという。祭神として天種子命を祀る。

三代王神社は、下総三山の七年祭りで産婆役を務める。この祭りは、室町時代の頃に馬加城主の千葉胤盛が嫡子出産に際し、二宮神社、子安神社、子守神社、三代王神社の神主に馬加村の浜辺で安産祈願をさせたことに由来するといわれ、その胤盛の奥方の夢枕に立ち安産を守護したのは、この武石明神であったと伝承されている。

#### (五)長作の長胤寺

正元元年に武石胤盛の曾孫で宗胤の従兄弟の武石新左衛門長胤が武石町の北側に隣接する長作(花見川区長作町)の地を領し、弘長年中に自らの館を寺として創建したと伝えられる寺院である。

長胤寺の由来については、境内の「當山縁起」碑の銘文に次のように記されている。

「源頼朝に仕え、千葉中興の祖と言われる千葉介常胤公は七人の男子を儲ける。各々、千葉介新助胤正、相馬次郎師常、武石三郎胤盛、大須賀四郎胤信、国分五郎胤道、東六郎胤頼、七男は出家し日胤を名乗り、三井寺にて祈祷僧となる。三郎胤盛が、現在の武石の地を、承安元年(一一七一)十一月一日伝領す。武石城の始まりである。四世孫武石二郎入道長胤公が、正元元年(一一五九)二月一日長作の地を領す。弘長年中(一一六一―六三)自らの館を寺とする。上総七里法華弘通の師、日秦上人(永享四年(一四三二)―永正三年(一一五〇六))の法孫日傳上人により、天文一四年(一一四五)日蓮門下に改宗、のち元禄一四年(一一七〇)東金最福寺の流れに属し寄席とす。爾来法華経の信仰道場として連綿相続している。三十六世

## 清寿院日祥

本堂屋根や雨水鉢には、千葉氏の象徴である九曜と日月の寺紋があり、本堂左手には眼病に効くといわれる薬師如来像と共に、開祖長胤の位牌が祀られている。

武石新左衛門長胤の名は、『吾妻鏡』にしばしば登場し、文応元年（一二六〇）正月二十日の条では父朝胤とともに御家人役を務め、また同年十一月二十七日の条では、將軍宗尊親王の鶴岡八幡宮及び二所参詣に供奉したことが記されている。

## （六）天津神社

長胤寺の北東に、小さな社殿の天津神社がある。千葉氏の守り妙見菩薩を祀った神社で、大正時代に天津神社と改名される前は、「妙見神社」と称され、武石長胤によって弘長年間に千葉六妙見のひとつを当所に安置したと伝えられる。本尊の逗子内の妙見像は秘仏とされ、「昔盗まれたが、寒川の漁師により海中から拾われ、返してもらった」という伝説がある。

妙見信仰は、中国で仏教と道教と習合し、仏教と共に

に日本に伝来した大陸由来の神で、中世は「妙見菩薩」として、千葉氏の軍神・氏神となった。妙見は北極星及び北斗七星を神格化したもので、千葉氏は月星紋や九曜紋を家紋とし、またその拠点には妙見を祀る寺社を建立している。

平成一五年に八千代市郷土歴史研究会で、社殿内を拝見した際、明治一八年奉納の、甲冑を着けた武将形で玄武に乗る姿の妙見菩薩像の絵馬が見つかっている。

## （七）長作の諏訪神社

花見川沿いの台地上に長作の諏訪神社が鎮座し、境内には寛永五年（一六二九）建立、天保七年（一八三六）再建と伝えられる社殿と社叢林が残っている。創建の時代は不明であるが、「延暦年中、坂上田村麻呂東夷出征の際、信濃惣社上下諏訪に陳し、連に東平あらんことを祈願し、稍鎮定の帰途に至り、上下惣社当所に遷置す。之を本村の鎮座とす。」と伝承されている。

現在、宗教法人の諏訪神社は、千葉市内に他に二社あり、近隣の八千代市高津新田の諏訪神社は、江戸時

代に長作の諏訪神社を勧請した神社である。

全国に約二千六百社あるといわれる諏訪神社の多くは鎌倉時代に勧請されている。諏訪神は、山の神・風の神として生活の源を司る神であり、また古くから山の狩猟神として信仰され、その狩猟に使う弓や矢からの連想から軍神として信仰されるようになり、坂上田村麻呂の東征の守護などの伝承が付与されて、頼朝や北条氏など多くの武将からも篤く崇敬されたといわれる。特に鎌倉時代、諏訪大社の御射山（霧ヶ峰高原八島湿原）を舞台にした祭礼には、鎌倉幕府の下知によって信濃国内に領地をもつ御家人すべてが回り番で費用を負担し、全国から御家人が参集した。幕府は建暦二年（一一二二）以来、殺生禁断のため全国の守護・地頭に鷹狩りを禁止したが、諏訪大明神の御贄狩（みにえがり）だけは例外とし、このため諸国の御家人らは諏訪社を勧請して、その御贄狩と称して鷹狩りを続けたともいわれる。（10）

また武石氏は、諏訪大社と霧ヶ峰の御射山に近い長野県旧武石村にも領地があつたと推定される。その武石村には大宮諏訪神社があり、また諏訪下社の御建造

営費用を分担していた中世末期の文書が遺されていることから、長作の諏訪神社も、鎌倉時代に信濃武石郷との縁があつて諏訪の神を勧請したのかもしれない。

### 三 長野県旧武石村の地名の由来と史跡

長野県長和町の仏岩から、諏訪と上田をつなぐ大門街道を下ると、長久保宿を過ぎて依田川と合流し、さらに下流で武石川と合流する。旧武石村（現上田市武石）はその川沿いに広がる村である。

この村の中世史の記述は、文書の残る十六世紀初頭の領主大井氏から始まっていた。「武石」の地名由来は不明とされ、明治時代に保科百助が武石村から産出する珍しい黄鉄鉱六面体結晶を「武石（ぶせき）」と紹介したことから、「武石の地名はこの石を産するから」という「地名伝説」も流布している。

鎌倉時代に遡る武石村の歴史と、地名「武石」が千葉一族の武石氏に由来することを明らかにしたのは、『武石村誌』の「中世」を執筆した櫻井松夫氏（11）である。筆者が、ホームページ『千葉一族』の短い記

事から武石村を知り、長野県立歴史館で『武石村誌』を見つけたのは平成一二年の五月。その翌年、仏岩と武石村を訪ね、忍性と小田山・箱根山・仏岩の宝篋印塔、千葉市武石町と長野県旧武石村、それらに關与した武石氏の存在をようやく繋ぎ合わせることができた。

### (一) 子檀嶺神社の「武石平胤盛」碑と「笹焼明神」

子檀嶺（こまみね）神社は、武石村沖の五日町に倉稻魂命を奉つて和銅五年（七一二）に創立、大同元年諏訪大社の二神を合祀したと伝えられ、五日毎に市が立つことから「五日町明神」と称された神社であったが、天正四年（一五七六）、依田川洪水により現在の武石小沢根に移転してきた。

この境内の本殿より一段低い平場に、墓股内部に月星紋がついた「笹焼（ささやき）明神」の小社殿があり、その社殿の裏に、注連縄が張られた円筒型の石塔がある。上部に月星紋が陽刻、その下には「武石平胤盛」の銘文があり、「武」の字は「文」の下に「止」の異体字で彫られてある。

笹焼明神はこの村を開発した神と伝えられ、武石村への旧道入口には、笹焼明神が乗って来た牛が力尽き石となったと言われる「牛石さま」が祀られている。

武士は所領を得てその地名を氏とするのが一般的であり、逆に氏の名をもって地名とする場合は、そこがまだ名のない郷村であることが前提となる。笹焼明神とは、まだ郷の名前もなかったころに入植し、笹の大地を焼きはらって村をつくった祖先神であり、その祖先とは、社殿の裏奥に石碑として祀られている「武石平胤盛」ではないか。と、『武石村誌』は推論する。

### (二) 武石山妙見寺の由緒と月星紋

武石村中心部の下武石に、武石山妙見寺という真言宗寺院がある。本堂の外陣大天井に、応仁年間に狩野派の秀山信尹により描かれた龍の絵があり、手を打つと竜鳴を発することから「鳴龍」としても有名である。

この本堂と庫裏の屋根には、千葉氏の家紋と同じ月星の紋がある。由緒書きでは、「嶽石三郎平胤盛が文治元年（一一八五）この村の鳥屋に一字を建て、大日如

来と妙見菩薩を安置した」のがこの寺という。

### (三) 大宮諏訪神社の棟札の銘文

諏訪社に対する中世武士の信仰が厚かった信濃では、武石村においても村の鎮守は下武石の大宮諏訪神社であり、また一五世紀の史料によれば、武石郷を含む依田庄は下諏訪春宮の二之柱造宮役を担っている。

その大宮諏訪神社の棟札の表面に「奉修復大宮諏訪大明神本殿拝殿成就祈願圓滿祈修」の願文に続けて「郷主 嶽石三郎平胤盛一族安穩」、その裏面には「元暦元庚辰年 朽ちたるにより改」と記されている。『武石村誌』では、江戸期初頭に前の棟札が腐ってしまったので新しく書き直されたのであろう、元暦元年（一一八四）は、木曾義仲が近江で敗死した年で、まだ武石胤盛が武石へ入るには早すぎる年号であることから、「嶽石三郎平胤盛」の伝承をもとに後代に記されたものと推測している。

### (四) 堀の内の館跡

鎌倉時代の武石郷はどのような姿であったか、『武石村誌』では、当時の文書史料が乏しい中、武石村の遺構調査や中世に遡る「開戸」（かいと）地名の丹念な考証から、開発当時の集落の景観の復元を試みている。

村内に多く残る小字「開戸」の土地は、鎌倉時代以降、武石一帯を領有していた土豪の館跡と推定され、小字「堀の内」の地を取り巻くように分布し、さらに堀の内には領主の館跡とおもわれる遺構が残っている。『武石村誌』では、石墨の内側を領主が住まう館跡、その周囲を用水と古道で大きく方形に囲む範囲を、領主直轄地の「堀の内」としている。現地へ行ってみると、石墨に囲まれた方形の畑があり、中世の館跡にふさわしい景観であった。

### おわりに

本稿では、山頂の宝篋印塔三基と二ヶ所の武石氏ゆかりの地を実踏し、地域史の資料からまとめてみた。

信濃の「武石」地名が武石胤盛の開発によるといいう説は、寺社や伝承、石造物などの丹念な調査によるが、

武石胤盛の名は、胤盛個人の事績というより、武石氏一族の働きを象徴して、伝承に残されたのであろう。

地域に点在する記憶のかけらをつづりあわせることにより、鎌倉期の村の姿が浮かび上がってきたが、文書史料を欠くことは否めない。今後は考古資料や遺構調査による新たな発見と検証を待ちたいと思う。

筆者が地域の歴史に興味を持ったのは、二十六年前に勝田台公民館での村田一男先生の「武士の館・村上正覚院」の講義をお聴きしてからだっと思う。それ以来、村田一男先生には、八千代市郷土歴史研究会の活動を通じ、多くのことをお教えいただいた。ご指導に感謝し、喜寿を迎えられて、ますますご活躍されることをお祈り申し上げます。

### 註・参考文献

- (1) 金丸和子「正覚院の仏像をめぐって」『村田一男先生古希記念論集』二〇一〇年
- (2) 井坂敦実「三石造宝篋印塔」筑波の文化財 工芸編』つくば市教育委員会 一九八九年
- (3) 山川均『歴史のなかの石造物』吉川弘文館二〇一五年八月 文中の銘はこの書による。本書では日蓮宗僧「寂日房日華」の関与、並びに製作者大蔵安氏は未完のまま他界、安氏の息子の心阿が正安二年に完成させたこと、また仏岩宝篋印塔銘文中の「日光」は「月光」と推論する。
- (4) 「南北朝期の越後佐々木加地氏の系譜」ブログ『佐々木哲字校』二〇一〇年三月八日
- (5) 『信濃史料』信濃史料刊行会 一九五七年
- (6) 『新編長門町誌』一九八九年
- (7) 櫻井松夫「地名の由来」『広報武石』武石村 一九九四年一〜二月号
- (8) 和田茂右衛門『社寺よりみた千葉の歴史』千葉市教育委員会 一九八四年
- (9) 『千葉縣千葉郡誌』千葉縣千葉郡教育會 一九二六年（復刻版）
- (10) 井原今朝男「諏訪信仰の流布と北条氏」『県史 長野県の歴史』山川出版社 一九九七年
- (11) 櫻井松夫「第二章 中世」『武石村誌 第2篇 村の歴史』武石村誌刊行会 一九八九年